◆ 花葉会賞受賞者紹介

百貨店から園芸の普及に貢献

鈴　木　邦　彦　氏

略歴

1946年９月　宮崎県都城市の母の実家で生まれる
1969年３月　千葉大学園芸学部総合農学科　営農気象研究室卒業
　　４月　西武百貨店池袋店入社
1985年４月　園芸部を立ち上げ、直営店舗を運営
1987年９月　西武舞鶴農場内に西武舞鶴植物研究所を開設
1990年４月　国際つばき大会を舞鶴市に誘致
1990年９月　セゾングループ会社西洋環境開発に出向
2003年４月　英国王立園芸協会日本支部（RHSJ）常務理事に就任
2007年３月　定年嘱託期間を経て、退職
2009年４月　オランダ友好協会会員

園芸ショップの直営化

1970年代、百貨店の園芸ショップは取引先のテナント任せでした。当時の社長堤清二は総合生活産業を標榜し、自ら仕入れて販売する直営化が求められ、百貨店で唯一の園芸部を立ち上げました。フォーマルに着けるコサージュショップ、ギフト用のフラワーショップ、自家需要のフラワーショップ、室内観賞用の観葉植物を扱うハウスグリーンショップなど、生活の中で楽しむことを提案するために、それぞれの関連フロアにショップを展開。

ハウスグリーンショップでは、雑貨に新規参入していた福助からマクラメで編んだ陶器鉢の提供を受け、赤塚植物園からボストンファンを仕入れ、当時ではまだ珍しいハンギング植物を販売。ギフト用には鉢物市場の西部ニッカンから品評会の優秀作品を仕入れて他の百貨店との差別化をはかり、花卉園芸新聞などにギフト情報を提供するなどして、直営化の優位性を発揮。ファッション界の石津謙介がファッションショップVAN、雑貨関係のオレンジハウスとともに、ハウスグリーンは大きな話題を呼びました。

独自の催事を展開

百貨店の催事は、地域紹介催事（京都展・北海道展など）やファッションバーゲンなどが主流をなしていたなかで、園芸文化協会や趣味の園芸などの協力で、７階催事場 760坪を使って園芸大バーゲンを展開、多くの趣味園芸愛好家の大動員を図ったこともあります。

舞鶴市にある牛の放牧牧場の再利用をセゾングループで引き受けていた時です。

日本を代表する植物のツバキが敷地内に多く自生していたことから、世界のツバキ品種収集を提案。原種収集では、唐つばきが自生している中国科学院昆明植物研究所と、学術ならびに技術提携を目的とした文化交流をスタート。1987年、舞鶴農場創立10周年を記念して、西武舞鶴植物研究所を設立し、国内外の研究者との研究交流を推進。池袋店のつばき展で、幻の金花茶を初めて紹介し大きな話題を提供。つばき展を恒例催事に結びつけました。

1990年、大阪で開催された国際花と緑の博覧会では、セゾングループとしてパビリオン出展し、国際ツバキ協会による４年に一度の国際つばき大会を舞鶴市に誘致。国内外のツバキ愛好家に西武舞鶴農場の世界のツバキの原種収集を知らしめることができました。

洋ラン展は他の百貨店でも恒例催事、小田急は向ヶ丘遊園で日本初の国際らん会議を誘致。西武も独自性のある洋ラン展をと計画。ハワイにあるアメリカ蘭協会（AOS）のジャッジを導入した、日本で初めての洋ラン展を開催して話題となりました。そしてこれが、今の東京ドームで毎年開催されている「世界らん展」につながったと自負しています。

英国王立園芸協会日本支部（RHSJ）

1985年、西洋環境開発が群馬県赤城につつじ・シャクナゲを中心とした自然観察園計画（現赤城自然園）を行いました。その折に、ロードデンドロンの収集で有名な英国のウィズリー植物園との交流ができ、その縁で英国王立園芸協会日本支部（RHSJ）が西洋環境開発の運営で発足。2003年４月、常務理事に就任しました。

2005年、英国王立園芸協会（RHS）創立200年を記念して、RHS本部のリンドリーライブラリーの所蔵する植物画の原画の提供を受けて、「500年の体系：植物画世界の至宝展」を開催。RHSの紹介と会員拡大を目的とし、東京芸術大学美術館、神戸市立小磯良平美術館、第22回全国緑都市緑化ふくおかフェアーアイランド花どんたくを巡回。常務理事として思い出に残る大事業となりました。

業績を振り返ると題してご執筆頂いたものをまとめさせていただきました。現在はオランダ友好協会の世話人として、毎年「花を愛でる植物園散策」を企画し、会員との交流の場を作っているそうです。ますますのご活躍を期待しております。　　（文責：山田幸子）

◆ 花葉会賞受賞者紹介

花の育種からチャの起源まで幅広く研究

山　口　　聰　氏

略歴
昭和46年　千葉大学園芸学部園芸学科卒業
昭和51年　大阪府立大学大学院農学研究科中退
　　農林省野菜茶業試験場久留米支場
　　花卉育種研究室に採用（研究員）
昭和53年　大阪府立大学大学院農学研究科　農学博士
昭和64年　農林水産省野菜茶業試験場
　　茶栽培部育種研究室に配置換え（室長）
平成８年　愛媛大学農学部生物生産コース
　　蔬菜花卉研究室助教授
平成21年　玉川大学農学部資源生物学科
　　資源植物学講座教授
平成25年　玉川大学を退職

山口氏は東京に生まれ、昭和４６年に千葉大学園芸学部園芸学科を卒業されました。卒論は育種学研究室の岩佐亮二先生のもとで行い、当時ご自身で熱中していたサクラソウの園芸品種について染色体数の調査を行い、３倍体や４倍体の品種が含まれていることを明らかにしました。この卒論は英語で書かれており、当時から研究者としての高い総合的な能力を持っておられたことがうかがえます。

卒業後は、大阪府立大学大学院農学研究科に入学し、当時「栽培植物と農耕の起源」や「照葉樹林文化論」などで高名だった中尾佐助先生のもとで、遺伝育種学の枠にとらわれない幅広い学問領域を学ばれ、タンポポをテーマに幅広い研究を行い、その成果を「日本産タンポポ属の種生物学的研究」としてまとめ、昭和５３年に農学博士の学位を取得されました。これらの研究成果は種生物学や分類学関連の雑誌で公表しておられます。また大学院在学中にはサクラソウの細胞遺伝学的な研究も発展させ、３報の論文として育種学雑誌に公表しておられます。

昭和５１年には農林省に採用され、野菜茶業試験場久留米支場の花卉育種研究室で研究員、主任研究官として、ツツジ、ツバキなどの花木類やユリやアイリスなどの球根類に関する育種および育種法の開発に精力的に取り組み、多くの農林登録品種を作出されました。平成１年には鹿児島県枕崎市にある茶栽培部の育種研究室に配置換えとなり、室長としてチャの育種に従事し、３品種を農林登録するとともに、チャ品種の早期検定や親子鑑別方法の確立にも貢献されています。

平成８年には愛媛大学農学部の蔬菜花卉研究室に助教授として転出され、約１２年間花卉を中心とした園芸植物の育種研究に従事すると共に、多くの学生を指導し世に送り出しています。さらに平成２１年には玉川大学農学部の資源生物学科資源植物学講座に教授として転出され、平成２５年に退職されるまで、園芸植物の遺伝育種を中心とした教育研究に従事されました。この間、永年のチャに関する研究成果を、茶樹の起源や利用の伝播、品種判定法の開発などの形で発表しており、こうしたチャの育種や文化への貢献が評価され、平成２３年には静岡県茶業会議所から杉山彦三郎賞を授与されています。

山口氏はこうした長い研究教育期間の間に、農林水産省海外植物遺伝資源探索の一環として行われた第一回花卉遺伝資源探索チームリーダーとしてネパールヒマラヤの調査を行うと共に、中国昆明で開催された国際花博の日本代表としての講演、オーストラリアにおけるチャに関する海外ワークショップの主催、さらにはチャの海外遺伝資源探索をインド、ベトナム、中国、韓国で行うなど、幅広い研究活動を行ってこられました。

このように山口氏は、サクラソウ、タンポポ、ツツジやツバキ、チャの育種や分類の研究に留まらず、細胞遺伝、花卉園芸、民族植物、農耕起源、栽培植物、遺伝資源探索など、きわめて幅広い分野を対象とした研究を自由人になった今でも継続されています。それをもとに、現在は農水省品種登録基準作成委員、現地調査員、伊予つばき協会会長、日本ツバキ協会理事、林間園芸研究センターの主宰など、幅広い社会活動に従事され、社会に大きく貢献されています。

（文責：三位正洋）